

伊豫谷登士翁著

『グローバリゼーションと移民』

有信堂 2001年 xii+256+xviii ページ

おのづか よしみつ  
小野塚 佳光

I

1. 移民の時代

本書は、現代の移民問題について掘り下げた考察を行った貴重な成果である。日本国民や政府はいまだに移民問題を軽視している。それは重大な過失となりかねない。

宇宙から見た地球には国境線がない。にもかかわらず国境を越えるために人々は命を落とし、難民の入国を拒むために軍隊が出動する。誰の皮膚にも、遺伝子にも、国籍を示すものは何もない。にもかかわらず移民は非合法化され、警察に追われ、囚人となる。

帰化や同化は問題を解決しない。差別され、抑圧されたエスニック集団は、時として迫害者に対抗する。たとえば昨年(2001年)も暴徒に制圧されたイギリスの旧工業地帯(Bradford, Oldham, Leeds など)には、怒りと不満で自動車を横転させ、右翼との衝突を繰り返す移民たちがいた。白人とアジア系住民とがにらみ合い、警官隊へ投石し、民家のガラスを割って、商店は掠奪され放火された。

他方、大量の労働力が内外から流入したからこそ、都市の工業や商業は栄え、植民地は開拓され、戦後もドイツや日本の復興は成功し、アジアは目覚ましいスピードで工業化を進めることができた。移民は何よりネットワークを育て、知識や経験を異なる社会に移植した。それを拒む者は、部分的に貿易や投資も拒むことになる。

「グローバリゼーション」も「移民問題」も、著者が言うように、多面的であり多義的である。著者

『アジア経済』XLIII-4 (2002. 4)

がこの2つを同じひとつの過程、すなわち経済的な「脱領域化」、社会的・政治的な「脱統合化」、さらには生活やアイデンティティの「脱近代化」の過程として、統一した視点でとらえた成果が、この研究書ではないか、と評者は思う。

2. 移民の理論

移民問題を理解するための理論的な模索は主に3つの方法で試みられてきた。すなわち、ミクロ的の均衡理論、巨視的理論、社会構造理論である。均衡理論では、賃金格差や失業率を考慮して、労働者が移住や出稼ぎを選択する。巨視的理論は、経済成長の長期的な波動と地理的な波及過程の一部として、人口や移民を重視する。他方、著者が属すと思われる社会構造理論は、市場の制度的・社会的分割や政治的な権利、国家の政策的介入や、移民にともなうさまざまな社会的・文化的な変化に注目する。移民は、ある社会構造の反映であり、同時に新しい社会変化の担い手である。

移民の理論は、異なった社会や時代をかかわらせるといふその本質により、容易に定式化できない。アメリカが労働市場モデルを重視し、ヨーロッパが社会的な権利を重視し、アジアが農村解体と世界市場向けの工業化を目指して労働力管理と雇用調整を追求するなど、地域に特殊な理論化を目指す方が有効かもしれない。

さらに言えば、かつて植民地を持った帝国も、植民地からの独立国も、今では移民受入国である。ヨーロッパの移民管理国家、高所得と社会福祉制度を守ろうとする小国、移民送出国から受入国になった例、高成長と海外出稼ぎを兼ねた例、アジアの労働力輸出国家、輸出加工区や多国籍企業と労働力の管理を重視する国家、移民流出を続ける移行経済、アメリカに向かう中南米諸国、互いに影響し合うラテンアメリカ諸国、格差の広がるアフリカ諸国、石油輸出国と労働力の調整・管理、その他さまざまなタイプを考察する方が、移民の一般理論よりも重要である。

それでも本書は一定の一般化を目指し、いくつかの点で成功している。

## II

## 1. 構成と内容

本書の構成と内容は以下のようなものである。

はじめに

## 第I部 資本のグローバル化と人の移動

## 1章 グローバリゼーションと現代移民研究の課題

## 2章 周辺社会における生存維持経済の解体

## 3章 無制限労働力供給と現代世界の編成

## 第II部 アメリカ資本主義のなかの移民

## 4章 アメリカ合衆国におけるメキシコ人移民労働

## 5章 移民政策の変化と「非登録移民」

## 6章 移民の非公式化と地方労働市場

## 7章 越境する人々・越境する空間

## 第III部 日本経済のグローバル化と外国人労働者

## 8章 「移民の時代」のなかの日本

## 9章 日本の移民労働者とアジア

10章 グローバル化と定住外国人の政治参加  
むすびに代えて

第1章は、グローバリゼーション論の多様な関心と意味を探り、移民問題の広がりをもその中に位置付けている。第2章では、資本主義世界経済が周辺社会の生存維持経済を解体し、世界市場に組み入れる過程こそ、ダイナミックな経済発展を支える移民たちの起点であったことを示す。そして第3章は、現代の無制限労働力供給を世界的に組織している階層的な社会構造を、ラテンアメリカやアジア、アメリカ、EUなどに言及しつつ説明する。

第4章では、世界最大の移民受入国であるアメリカ合衆国が、どのようにしてメキシコからの移民を受け入れてきたかを歴史的に示す。第5章は、アメリカの移民政策が変化することで、移民の出身国やエスニック、性別構成が大きく変化したことを示している。そして第6章において、「不法移民」の問題と地方労働市場の変化が指摘され、第7章にかけて、エスニック・マイノリティーがどのようにネッ

トワークを形成し、彼らが新しい「越境空間」で、多国籍企業や世界都市とともに、新しい政治的主体となる可能性を展望する。

以上の考察は、日本の「外国人労働者問題」に対する著者の立場を示している。「鎖国／開国」論争から批判的に距離をおいて、著者は第8章で日本経済の構造変化と現実の移民過程を重視する。それゆえ問題を日本とアジアの歴史的な関係にまでさかのぼり、第9章では「外国人」を差別し続ける近代国家としての日本を厳しく問い直す。最後に、第10章で定住外国人の参政権問題を取り上げ、市民権と国家の見直しに言及する。「むすびに代えて」に示唆される、戦争や女性問題を含めた、貧困解消と人権擁護に立った世界認識への飛躍を、著者は本書の帰結とした。

## 2. 国民国家と「3つの段階」

著者の多面的な論述を見るうえで、評者がもっとも注目したのは、農村経済解体論（第2章）と、外国人と近代国家の3段階論（第9章、215～216ページ）であった。資本主義が労働力供給のメカニズムを必要とすることを、著者は繰り返し強調し、「産業予備軍」の論理に重要な役割を与える。著者にとっては、資本主義的蓄積が世界的規模で拡大するにつれて、世界中の農民たちから「生存維持経済」を奪い、「外国人」としてその労働力を管理するメカニズムこそが産業予備軍である。

こうして、近代的（資本主義的）な「移民問題」の成立と展開を、私たちは理解する。第1に、近代的「移民問題」の起源には「国民になること」の強制があった。工場労働者や学校、軍隊から、外国人は排除される。さらに産業革命が進み、植民地を求めた帝国主義的拡大をとまなう中で、第2に、近代国民国家は「労働力の再生産」を組織化することとなった。第3に、「労働市場が世界的な規模で編成される」ことで、さまざまなエスニック集団への分解を促し、国民国家の枠組みを動揺させつつ進展するグローバリゼーションとなった。

## 3. 伊豫谷「移民論」

## ——世界都市から近代批判・文化論へ——

著者の独自の視点は、移民コミュニティの形成

と運動を重視することから、さらにその意味を、一方では世界都市論により、他方ではアイデンティティや近代批判の理論へも拡張して、普遍化を試みたことであると思う。こうして、個々の移民タイプが持つ特殊性を活かしたまま、普遍的な理論化が図られる。

しかし、近代の脱構築論は、「移民」やエスニック集団が持つ飢餓感や向上心に十分応えられず、政治的な要求を逸らせてしまう危険もあると思う。評者はその意味で、エスニック集団による社会運動や都市政治への参加、新興企業活動へのかかわり、ヨーロッパの移民差別、外国人排斥をテーマとした制度化、政治論争などを重視する部分に賛成である。

### III

#### 1. 低賃金労働力から弾力性へ

本書には、他にも多くの理論が組み込まれている。しかし、今でも多くの「移民論争」は低賃金労働力の供給問題であり、受入国のコスト・ベネフィットによる選別政策である。その背景には何があるかを本書は示している。低賃金労働力が供給されるのは、農村の生存維持経済が労働力再生産費用を肩代わりしてくれるからである。そして、「緑の革命」や「新国際分業」という農村経済の解体は今も続いている。

それは経済発展の正しい過程であり、移民は新しい社会で統合化されると信じるなら、「移民問題」とは過渡的現象であって、抑制や解決されるべき問題ではなく、むしろ促進され、積極的に支援すべき社会変化である。しかし、社会構造理論が主張するように、大規模な国際移民が行われた時代こそ、世界経済の構造的な格差と社会的な差別が「近代国家」によって強固に築かれた時代ではなかったか。

グローバリゼーションは、この論争を再び取り上げている。今、豊かな受入国が求めるのは単なる低賃金労働者ではない。貧しく、勤勉な労働者の予備軍を利用するには、直接投資に国境を開放させる方が良い。他方、豊かな国は、より差別化された、「弾力的な」労働力供給を求めている。「産業再編

成」や「世界都市」が、労働需要をどう変えたか、に著者は注目する。

#### 2. 越境空間

本書の興味深い考察に「越境空間」(第7章)がある。それは、人も資本も、国家も越境する時代への予感である。

すでに著者は、前著『変貌する世界都市』で、インディオの血を引く不法移民のロサ・マルコス・ゲロがたどった半生を紹介している。彼女はペルーの山奥で生まれ、10歳のときによりマへ移住し、高校を卒業したが仕事はなかった。そこで友人から聞いたニューヨークへ向かう。結婚し、ブロンクスに住んで、子供もできた。しかし夫と死別し、母や兄弟を呼び寄せる。家政婦から、銀行の食堂へ、アメリカ社会は移民を吸収する場を用意していた。

第7章の描くアメリカ西海岸は、メキシコとカリフォルニアが、国境ではなくひとつの伸縮する領域として、産業や政治、人々の生活を呑み込んでいる。サンディエゴからティファナへは、その景観を大きく変えながら、自動車ですぐに移動できる。ここはもはや国境警備隊が監視する境界線ではなく、政治的、経済的な統合を目指すNAFTAによって管理されている。

「移民」や「マイノリティー」が問題ではない。「言葉や習慣などによって構成されると考えられてきた近代国家像は幻想でしかなく、そうした幻想を内側から掘り崩す空間としての越境空間があらゆる場で増殖を始めている」(175ページ)と、著者は展望する。

### IV

#### 1. 「鎖国論」と「必然論」

日本で言われている「外国人労働者問題」という認識枠組みでは、私たちの国が移民の時代に生きていくことを理解できない。「鎖国論」も「必然論」も、しばしば、外からの脅威や国際的变化を、あるときは選別政策で管理し、またあるときは社会的調和、安定性と同質化とを意図的に混同して拒否する。しかし日本の政策論争が示すこうしたコンフォーミ

ズムの脆弱性は、グローバリゼーションと移民を扱ううえで、重大な足かせとなっている。

著者は「鎖国論」と「必然論」との論争に加担しない。むしろ、コスト・ベネフィット分析ではなく「日本固有のエスニシティ問題」として、移民の法的・制度的な受入条件を問題にする。それは「共生」や「多文化」という言葉を繰り返すだけでなく、「定住外国人の政治参加」としてエスニック社会との対話や紛争を処理する中で具体的に解決されるべきだ、という主張である。

## 2. 世界市民権はその答えか？

移民とは何か。外国人とは何か。経済発展が地理的な資源の移転をとまなう以上、人々が移住することは必要である。それを国民国家が管理する根拠は何か。

アメリカで成功した移民たちなら、むしろ移民を自由化して、労働市場が機能すれば、それで十分ではないか、と思うかもしれない。高賃金職と低賃金職が直接に競争することはなく、誰もが能力によって上昇する機会を与えられる。しかし、グローバリゼーションの下で労働市場の再編成は激しく、不況になれば「同化」は必ずしも十分な答えではない。

ヨーロッパで差別された移民たちなら、むしろ移民の社会的・政治的な権利を保障して、移民たちの文化やコミュニティを尊重し、既存社会と協調しつつ自立する機会を与えるべきだ、と思うのではないか。EU 諸国が“grand bargain”として、移民の流入を規制しつつ、国内エスニック集団の社会的な統合に協力し、あるいは送出国への経済援助や貿易自由化に取り組むのは、こうした姿勢の現れである。

そのうえで、EU も NAFTA も国民国家を超えた政治・経済統合を模索している。

国家を超えた市民権、言ってみれば「世界市民権」が「移民問題」の最終的な答えだろうか。著者は、市民権がしばしば外国人に「同化」を強制するだけで、社会的な「差別」を解消できないことに注意する。そして、サッセンが示した「国際人権レジーム」がナショナリティーの枠組みを変えることに期待する。

著者が指摘するように、移民にさえなれない者、女性であること、そして戦争がもたらす変化が、全体としての「移民問題」をさらに拡大する。社会の崩壊が移民をもたらすように、社会の再生を移民たち自身が担える条件を移民社会が住民たちと合意できれば、「移民問題」は存在しないはずである、と評者は思う。豊かな者たちは、移民を選別する思想から、早く卒業するべきだ。

国籍と市民権、社会的権利の思想は、必ずしも同じではない。国家の権力ではなく、都市の自治が、互いに共通の世界的な「人権レジーム」を定める時代が来るかもしれない。日本の政策担当者も、移民論争の論客たちも、本書から多くを学べるだろう。

## 文献リスト

### <日本語文献>

- 伊豫谷登士翁 1993. 『変貌する世界都市』有斐閣.  
小野塚佳光 1989. 「世界的産業再編成と移民社会の拡大」『愛媛経済論集』第9巻第1号.  
——1994. 「経済学と空間編成——工業化と都市化の社会的制御——」『経済地理学年報』第40巻第1号.

### <外国語文献>

- Castles, Stephen and Mark J. Miller 1993. *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*. Basingstoke; London: Macmillan Press (邦訳は関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会 1996年).  
Cornelius, W. A., P. L. Martin and J. F. Hollifield eds. 1994. *Controlling Immigration: A Global Perspective*. Stanford: Stanford University Press.  
Margain, F. and W. R. Mead 2001. “A Fast Track for Mexico.” *New York Times*. June 24.  
Sassen, Saskia 1996. *Losing Control?: Sovereignty in an Age of Globalization*. New York: Columbia University Press (邦訳は伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代——国家主権のゆくえ——』平凡社 1999年).

(同志社大学経済学部教授)